

第一回研究会について

—宿題委員会から— 安 原 茂

本年度の村研大会における共通課題をどうするかは、宿題委員会の課題であるということになっておりますが、共通課題をそもそも設定すべきか否か、についても検討すべきであるとの意見が過日の拡大運営委員会でも出され、宿題委員会ではそこまで決定する権限が与えられているか否か、宿題委員の一人として疑問を感ずるとともに、荷物の重さをあらためて考えざるを得なかった次第である。しかし共通課題を設定することが会員の自由発表を制限することになるか否かということだけに限定すれば、過去において自由発表の申出が制限されたことは一度もないわけで、会員の各自がそれぞれの問題関心に即した調査結果をもちより、共通の認識を蓄積させるために自由に検討するという、村研の大会のありかたは現在でも少しも変わっていないと思われます。

また、昨年度は「日本資本主義と家」という共通課題をたて、課題報告と討論を行いました。が、課題にてらして、報告と討論をふりかえって残された問題の有無を検討することは、今年度の共通課題をどう考えるかにあたって前提として検討しておかねばならぬ事柄であります。

以上の事情から事務局からの要請もあり、前年度から引続き宿題委員として残られた、高山、似田貝会員と御相談し、とりあえず大

会時に司会をお願いした高山会員から、前年度大会における共通課題の討論における問題点を整理して御報告をうかがい、それを基礎にして、今年度の課題について考えることにしました。

第一回研究会は四月十二日午後一時より、中央大学会館にて開催、高山会員の別記の如き報告が行われ、大会時の討論のみならず、前年度の研究会における報告者の論点もあわせ整理して、問題の所在をあきらかにするもので示唆するところ多大であったと思われます。

報告後、似田貝会員を司会に質問・討論がおこなわれ、蓮見、高橋、柿崎、小池、島崎、細谷、安原会員から報告に対するコメントがおこなわれたが、そこに提出された論点は、報告者の提示した論点をふえんしながら、あらためて、報告者の提示した諸問題がさらに追求されるべきであることが示唆されていたといえましよう。

たとえば、△自作農的イエVとはいかなる形態においてその特質をもっともよく示すものであるのか、またその性格において、農地改革以前の地主制下におけるそれと、農地改革後のそれとの間に、どのような意味で連続と差異がみられるのか、また農民間の△共同Vとイエとの関連や、現段階における共同化あるいは協業の現実的条件とイエないし農民家族とのかかわりなど、その一例だと思われます。(当日は録音テープを用意することができず、不十分なメモでふりかえってみましたので、他にもなお重点な論点多々示されていると思ひますが、しかし、内容的には高山報告の提示した問題点を多く出るものでなかったと思われます)。

以上のような討論の後、研究会を拡大委員会にきりかえ、今年度の共通課題について議論されましたが、農民におけるイエないし家族という、村研会員にとって極めて基礎的な関心課題についての理解をめぐって、多くの問題が残されていることが確認される以上、今年度も前年度の共通課題をひきつぎ検討してゆくことが、確認されました。

この課題を今年度はどのように展開してゆくべきかについては、「大会報告では、明治期についての報告もあったので、今年度は研究会でいわば戦中期について検討し、大会では戦後についての報告を求めては如何」「戦後に重点をおくのはよいが、戦後のみに限定するのは好ましくない」「戦後への展望をもった戦前期についての報告が必要」「研究会ではイエないし家族についての理論的な整理をおこない、大会では調査報告を求める」「大会にも理論的な報告があつてよいのではないか」など、活発な見解が提示され、これらの討論を参考として、宿題委員会で具体的な展開を検討することとされました。

以上のように、(1)今年度も共通課題をかかげることとし、そのテーマは前年度のテーマ「日本資本主義と家」を継続するものとする。(2)研究会で問題をどのように展開するかなど課題の具体化については宿題委員会で検討するとの二点が当日の参会者により了承されたことですが、問題はなお広汎多岐にわたっており、宿題委員会で検討を行うことは当然ですが、会員諸兄からも、積極的な御意見、御

提案がおこなわれれば有難いと思ひます。

なお当日の宿題委員出席者は、高山、似田貝、白井、安原の四名でしたので、会議後打合せを行い、連絡役を安原・似田貝が担当することとしました。

(以上 安原 記)